

紅葉の里山を背に、密集した優美な茅葺き屋根の家

[歩いて・見た・歴史の家並み] - 23

南丹市 美山町北 (京都府)



JR京都駅から北西方向へ車でおよそ1時間30分。南丹市(2006年1月に園部町、八木町、日吉町、美山町が合併して誕生)は京都・丹波地方に位置し、日本海に注ぐ由良川と太平洋に向かう桂川が流れている。その由良川の上流部、市の最北に位置する美山町は「町の約95%が山間地で、かつては杉の銘木の産地でした」(南丹市役所美山支所産業建設課)という所だ。

由良川沿いに蛇行して北に進む。空が広がって平地に出たと思ったら、山裾に並ぶ茅葺きの屋根が見えてきた。背にした里山はみごとに紅葉している。「かやぶきの里」だ。

この里は全46戸のうち34戸が茅葺き屋根で、3戸が茅葺き屋根を鉄板で覆っている。一つの集落で、これほど多くの茅葺き屋根の家があるのは全国でも稀のようだ。

「茅葺き屋根の家は蒸し暑い夏を涼しく過ごせるので住みやすい。数多く残っているのは、住人が先祖伝来の家に愛着を持ち、大切にしてきたからです」(「美山民俗資料館」館長の中野順蔵さん)

美山町の茅葺き屋根は「北山型入母屋造り」と呼ばれる葺き方で、一般的な葺き方の寄棟(屋根が4面)造りと、切妻(屋根が2面)造りの両方の特徴を兼ね備えている。美山町は、若狭と京のほぼ中間に位置し、昔、若狭から京へ塩や魚(特に鯖)を運ぶ、いくつかあった「鯖街道」の中の重要な一つだった。そのためか、日本海側特有の豪雪に耐えられる造りでありながら、京の都の影響を受けた繊細な美しさが見られるという。

「かやぶきの里」は、ゆるい傾斜地に住居が密集しており、集落内を細い道路が縦横に走っている。日本の原風景のような光景だ。

茅葺き屋根の棟は、冬季、降り積もる雪を滑り落ちやすくした木製の千木(雪割り)を載せた屋根形である。千木の縦板(うまのり)の数はほとんどが5本だが、7本の家もある。「7本の家は往時



紅葉の里山を背にした「かやぶきの里」の遠景。穏やかな秋の陽を浴びて、時間がゆったりと流れていく。

の豪農か庄屋だったと考えられます」(美山支所産業建設課)

美山民俗資料館(旧家を復元)は、約200年前の中層農家住宅の形をよく残しているという。茅葺きの屋根が低く下がり、土間(「上げ庭」という)は高く、狭い。囲炉裏で暖めた室内の空気を外に逃さない工夫だという。土間の隣(南側)は馬屋(実は農耕牛の部屋)。土間を上がると台所で、囲炉裏がある。土壁がなく、すべて板張りなのも特徴である。この木と草で造られた家の中にと、何ともいえぬ安らいだ心地になるのだった。

「かやぶきの里」は平成5年、地域の人たちの景観保存活動が実を結び、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。この保存申請には、地区住民の全員が賛成した。これは全国でも前例のないことだったという。

かやぶき交流館で、丹波名物の黒豆を煎った「黒豆コーヒー」を頼んだ。汗ばむような秋の陽の下、茅葺き屋根の家の縁側で独特の風味のコーヒーを味わう。

何もかも忘れ去るようなひと時だった。

秋の陽に映える「かやぶきの里」。この屋根を「北山型入母屋造り」といい、豪雪に耐える堅固さと優美さを兼ね備えている。道端の小さな祠が里の風景によく似合う。



火に弱い茅葺き屋根の家を守るため、集落には62基の放水銃が設置されている。5月と11月に器具の点検などのため行なわれる一斉放水は、観光客に人気のイベントとなっている。(写真提供/南丹市役所美山支所)



① 美山民俗資料館の玄関。屋根が低く下がり、土間(「上げ庭」)が高いため入口が狭い。
② 同資料館の全景。右が母屋で左が納屋。
③ 土間から見た屋内。囲炉裏の左側が台所で、正面奥は右側が夫婦部屋、左側が納戸である。



茅葺き屋根の棟に載せられた木製の千木(雪割り)は、降り積もる雪を滑りやすくしたものだ。千木の縦板(うまのり)はほとんどが5本(左)だが、7本あるのは往時の庄屋あるいは豪農の家だったとされる(右)。